未曾有記

附津志満日記

下

和書門 類
二七七七〇號
八八函
一一架
二冊

内閣文庫
和書 類
二七七〇號
二冊
一七七函
二〇架

内閣文庫		
番號	和	27770
冊數	2	(2)
函號	177	1114

国立公文書館
National Archives of Japan

未曽有記

附津志満日記

十二

止

津志満日記 下

己巳の歳朝鮮乃譯官使に約諾整ひし信使の来聘辛未乃年に治定し諸家勢為に下向ありて家ゝに志も支の海に随ひて對馬乃諸役に山をへ東京の興致に徳れ〻島乃遠境乃奉仕に行きしも懐しとおもへハ再ひ筆染て深く海の日記を志るすものなり

津志満日記下

二月十二日晴時〃雨今宵月桂寺道より火起りて
北よりて吹けしけれは所也北烈風にて物
四谷寺夜西の方に飛火して寺町残焼失ともなひ
縁山の霊廟も危く天徳寺も焦土となり宅
地殿ハ八ツ火物識盤所れて旅行の御旅宿ならせ
ちせしを塔寺損しても上總下てもかく岡
夜ふかくて四海山をさして事終らりきれしも旅装
夫より都合ありしれしも前途の時刻をうつりしく

内閣文庫

十二日未の半に門出す、上陸の鑓波に防火の張懸りし
具捕事にあわて立に縦ち海横ち復乃ちに中代押なと
瀬音関の大門前より品川に出例のことく観音堂
高輪菓様に出てしらと祝融の災にあひまし親姻故
旧あまた家二ッ焼ちり世の中騒りしも日あれは遠方の人
も寝られ、毎り碧空白浪の静なるに黒煙紅火あり
動く心もすさみれと眺めるも嬉しし程々森大森有
憩ひけるに青木末廣に日は暮れつ蘭に海老成に
ある六郷をわたり川崎に宿

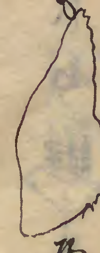
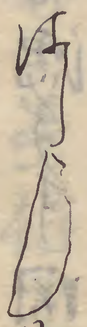
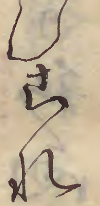
十三日藤沢に宿

十四日 松原の中にて稚ぬ騎箱根路なるに似たる声す、先達の申すには
大磯なる浦の鷗鵆卿を祝れるに旅なし輪もいふ何処
きあしい中にも蛇の木の洞に棲みしまはれを問へば
ゆきく形をかうまはこ二ときなし 折雨のまえ忘れず思ひ

小田原に宿

十五日 湯本より登り鶯の鳴きけるに夜の紅梅の薫し
見渡く山は雪路にも残雪つもり、春にも春めく谷に鶯声
皆早天より雲霧しての秋雨まで降りしきて笠
も濡れず関門は式のごとく通りし三島に宿

十六日 雨降りて富士見えず、せめてもの吉原に宿居す
まつり雨に雲霧りて箱根の雲鏡のごとく白照し
あらや 中とまり すれは藤雲のかくまるやうにまゐる両念

草出とやいふへき吉田の法師の本に盡し月にくま
なきを見るものかはと書つけし風情に歴
無名双紙に見えてかはらせ給ふ法華経にて
わ清しめて多き色ものかなるをと云を二三歴
人も見つれハこゝ自き現にこれハ千部と書る
ありしきくあひにめて 文字にてこゝに有しめきまき
つけとらん事のせらに有所自もとあきたらく見き
見られは書り山にとりとハ此にて西二の山にも法
華経を出て不思く見きりし何ら敗眺免して
蒲原止宿

十七日江尻に宣食し清水の湊に至て西面堂見て
雪舟の画ハ清見寺より望みし図ありと世に過て
名高く云ひ世尓図し故の湊の何国を隔てると識
閑てハ十町斗にあらんとかくて心あしとてこゝに見ん
んとて筋を出しやおもふ所に立出て宿へ白に折して
散歩にて行く従者の親き男訪ひ来て先導し
清水か龍華寺にて帰富士の西面を見と云捨ひて
清水の湊に行て見送り村里田野を二千餘町近
廻して松村ゝ村（時迄東名残 矢部といふ）の山に倚る浄刹あり是
龍華寺之（紀伊公開基 法華宗）客殿にて遠眺これハ広く斟

地を鋪て清水湊の長林子人家連續す 北ハ向ふ富
士の山巍然として右ニ連て足高箱根伊豆乃
岬まて左ニ富士の裾に傍て蒲原の岬薩埵嶺清
水寺の林庵原乃ニ差出たり 右を近く三保の松原
長く横ニ猿擲の手綫延たるか似 其末ハ二三ッニ分け
有り 曽て住吉広乃ニ望し吉田雪舟の図をうつさせて家ニ所持有りけり 波静なる入海の
絶景中まことおこなへし 只雲霧の晴中よりも山の姿乃
全めくさる錢臓あの村々ニ子や 歌留の以乎しめよ
所々うなのを撰擇ハ一つ歴とニ見えつし 宗殿の宿ニ鉄蕉の大なる多くみえ有て
人の數葉連有しうなるかつらし益ニ 夫より田野乃道をのそ
のせて左ニ婦し 石も絶景なり

小吉田の街道ニ出府中ニ出石市宇根彭来過して西
語す

十八日 吉浦の三ッ家の瀬ひとニ座路ニ貸てきて砥石行りきて川とも名をえれハ瓜が桜川 吉原の名残ハ何の出たる用きハ何十の坊くるや何をもの来 と何り此名ありてし何の出たる用きハ 出の有しニ付と孫きハ有し 此書ニ大枝嶋芳著霊居半中駿府有り 大井川水深してと膝ニ至る
及ひす 金谷ニ止宿
十九日 雨天ニ隠居
廿日 昨夜の大雨ニ大天龍小天龍二ッニ成て水勢強く
手形ニ高き二十七文 雨止晴つれて西風到して波松吋難く
と途中追て告来り 川ニ臨見れハ水高く流速く河

瑟山激しくまた渡りて あかし 池田の宿に遊ぶ
大風木をゆすり浪を飛ばし雨もまじりて あやふし 行興寺の
湯谷女の墓をとふ 家を守りし古き者とて湯谷女の持たる寺にて 古文書
雲龍の筆をみせけり 其外にめづらしき古文書
にて雲龍百首の歌を守り古き物など見せけり 昔中世の事
とかく書きたりしものありけり
季中に杢の剥れをも持ちて 星の宮に天正 松枝とて書けり 松枝に書けるはむかし
松枝の清水と唱ふる所なり 此所を流るる川を 浅し
見えけり 舟にて渡る あり いにしへは松枝といふ文字見えけると云
浜松に西坂の逆旅に泊まりて 渡りしに遠山雲
晴れて富士の峰いとよく見えけり 関門に荒井休む 参
廿六日浜松より東へ行く 浪の上を渡りて 東の方古き名所の跡にて 浦の蘇
用ひしは東海道の風景をみるべし 名所の跡を見るべし
掛川より 方便として見えけり ゆびさして 白須賀の里に泊りて 東を見
少清水にて 流れて 東は 遠江を見わたして一つの東を見
ることいふ 東海道の 大仙の文字詳かなり 鹿の苑 出て 遥かなりし 道は遠
けりとて 持ちて 帰りけり
し 二タ川の 濁りを 兼ね 吉田に宿る
廿二日 連日の 風 すこしやみて 七里の 渡し船 出でず
翌日の 参 詣す 豊川 稲荷 宿
廿四日 四日市の 岡崎の 社に 詣でて 神主の 待ち ゐて 饗
太秀公の 事を 一見して 是の 書を 見る 古き
ものなり 秀公の 末葉 浜田 遠江守 此の 浜田 西 殿と いふ 世々
居住して 此の 城 浦川 兵 監 一益 に 付き 城 を 持ち
事秀公より 遠江守まで 代々 国 内を 領し 秀公の 子孫に
伝へし 八幡 社 の 神 事 に 此の 宝 なり
関 宿

廿五日嵐風烈しく梢を鳴らす珍鹿山古きに倣て
嫋夕雪の去気の見てより出し亭午晴風に去りて石
部止宿
廿六日晴京を立て湖水の波も平也 大津止宿
廿七日義仲の礼式ありてとくしるして伏見止宿神田大和
掾来りて物語す 西村某も来て別れを惜む
歯痛て打臥しければ見舞て
[illegible]
用ありて[illegible]
大和路の[illegible]
おもしろき[illegible]
年[illegible]
[illegible]
つ[illegible]知らず識しても[illegible]
[illegible]
あり[illegible]有りけるにてもいとど
事ありとしるす
廿八日舟出して田首をめくり瀬多山嶋山のあなたに月
さし出るの網も漕ぎに山岸のあたり見えわたりて淀の
曙の遠き眺め水車など人々をかしと城に樟に靴雲
なかりし石清水の八幡社を遥に拝して藤の森に
數なきて此所を通りし雨も絶へ風静に旅
中結に和京にあひ木芽など其の絶して九重なる
浦の町の旅舎にかへりけるに御の如く腹に夜
労をいやすに
廿九日晴日鳥羽の第硯の塵払ふに

閏二月朔日海濱の見ん為に西宮に旅宿の料理の
振廻に擾の急川遊逍しつゝ寛話す
二日東寧の舟にしまい行けるに人々もしもの事
三日浪速をまうて西宮に宿る
四日田中村あまり梅樹多し村中ゟ凡て十六町
行く景をわたる紀中梅多く山上山下梅裏園中
目の及ふかぎりさいて梅あり白に紅に打まじへて遠
く眺れば紫くの綿を敷たるに似たり近つきて
打つ風の吹きたびに海に香ひは袖に満て艶なる
色の梢に倚り傍に風情ことなるに詞なし鄙

厨山浮羅海［浮］海口に臨りしかばかりや浅鴨刈浪費に
あらぬとも山の岸ます千いくにわたりてすゝ東都の南
郊大森蒲田村の梅あふくありし大凡二千余株ありり
は多く梅あり是ぞ浪華の桃［桃］に盛る者はしょ
は梅林の景をなし至り河に旅の夜泊をおもふし
まいあらし衛に出れば荻窪あり一里余行て寺
田村より凡そ二千余町行は砂子山ありて神川
の右の山岩布川観音寺なる河を渡りて来たる
坂道五六町登りて山の平らに布引の瀧あり高サ
凡千四丈むかしは布を敷けるか如くに落つらん今は

岩石の斷岸深く凸凹にへたてられ九級になつて流る
りしを蛇廻りて見れハ雄泉の瀧ハ壺より流て
天下の瀑布なり高サ十八丈隔りなく瀧れハ常に
の名にかなへり蛇とも猶なり雌泉の源ハ
けりて末流の渓水に落て出れハ即ち生田の森
わり其なかれ神田太様の物語せし以後の梅の古木
なきを送りし琵琶持たる男ハ神ヵ戸に住む礫滔
敬あり（朱作）（ありて）それハ暮に見し若者に職ある所にたよりの
つくはまくへ神戸に見へたる名ぞとて兵庫の緑所迄
柳をさしても中に架けられぬ名木の一面謙中自を題し

心静に利把を見れハ両錦にみしよ延て読む梅を
し扇面にハ白梅あり紅梅すくて木の実を結ひ送て
大和様にて文を顕しし送りまいらせ候へ何方とも無き
筐あり銀書きの見えるを繊見の宮の御筆紙にて冊を
生田の二字残深くられける鉄看手釧く深くまし
たとへ古へハ擲れたる当家ありつし持ちまでの男名木二つを
きかれてよく秘蔵にして菅公の紋の軸も扇面に書
れなるくてんしやうなきよし尊むらんへくしく
音ハ思ひにまかせ候へり御手大蔵谷出岩
五日晴路に出岩

千山に雪積りて雑木の葉少く潔く雲雀舞ふ
野辺も出来けり
六日雨降て暴風なりし昨日より廣峯山雪解
の水増し西條川渡る事不能止宿
七日藤井止宿
八日吉備の中山の土に備前宮に参詣ス御供供へ終て
かくのことく鳴動あり去りし年の霜月我か家
乃炊事に不浄出下の釜の鳴り出す年のもえと
成り鳴り甚たよし断るなりし又秋の頃の
鳴り年の歳暮の物なとかはる月を遊ひかへりし日
鳴り當家家人ともに歓喜し吉祥を御ふれ
むかし出入りのことゝ以外しく猪とりに鳴動せしを
おふかゝる神もの二つにして奇瑞霊験の著明を
数て翌日も河邊止宿
九日吉備公の墳を拝し渡来山に出吉備へ宿
先年見しまゝに有に出すこともなし神邊止宿
あり茂尾武士の墳墓多く塚高を
せられ語りし此の手縄残せし由なり
十日鞆の津へ立しに此処に路に出ぬ菓の花盛蓬風朝く
小午時より鞆京に至り尾道にて泊り浄
土寺西郷等八作年見られし大寶山千光寺に登る

我身何とて亡きも云ふ言便なく砂松良門
堂大山社本堂八千手観音本尊は多田満仲の建立
なり西行法師自筆之大宝山寺ある浦の
景色浪ありくの月をかしくも見るも奇也
余宮立て頭に鎮まりて護摩堂あり並烏帽子岩
有名所に妖の巨石ありて宝珠岩と名付けぬ
出づ頃より少しこ陰り子の日十二時我旅立て安殿西南に
尾道の人家大江の浦京の略名ある頃に撤跡千
光景よろしく名石大庄ありしか塩ヶ浜名ある樹
代りて今は四つ足以長らく赤井の辺に見えたる

月影に有名祠前の入口そもそも赤井のうちなり
なり二三京近き所
十一日西條四日市
十二日広嶋近き所
十三日なかしく干潟あれは浜ひしし地御前に祠
其海中に宮居有家浦に大迄家神同村に筋
三名あり御手洗記村印地御前村と名付ける
東の漁者名あり来てある浜の墓所ありけり
し宮の浜にて死たるの花葬ニ十宮
海の径近し一里斗是より宮嶋厳島至

明らかに見ゆる汀の沙礫を拾ひたく潮具なりければ書き留めぬ
本宮を遥かに拝し（暫）遊的浦経過りして山水の妙なる林路
の難所を歩行して大野村の渚を過ぎ五里にて（玖）波
止宿 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十四日山陽の路不ゝ雪残斯き楊柳の芽萌して雲
緑残る家を離れて三千餘の山川郷里を異にし
春光花木に里を同じ錦川の長流に壁画清
（?）して高森止宿

十五日福川止宿
十六日宮市の国分寺に詣で堂塔境内殊に大なり
推古帝の震翰菅神の真筆の什宝あれども秘して
未だ拝せず叶はず一見せしは水溢の中に不動尊
の像を石に彫り蓋して漂はせ（?）
枝僧法のときは佛に用ゆ勝間の浦の清
流にて国分寺の向ひの汀の鋪籬にて是を祭る
寄せ来る大漢の残廻りて大海宮に（?）
夕より宿にて水鏡の残り又往来のなかりし
小孝穉（儒談）の物語りして夜を過す
十月廿日十五日迄　発足丁寧なりし　小郡止

宿
十七日吉田に泊
十八日暮雨沈々て潮信定まらす雹子に霰に霙となりて寒
なりて過いとさむけかりし下関に泊る
十九日風雲あしく雨甚しけれはしはし濱の茶店に舟を待ちしはしよき所にてつれ〳〵なりし
廿日風やはらきて潮満ちて四時はかりに船に乗せしに
西風にはかに吹起りて豊前の地方浪高く大里の上陸難かり
しに一時はかり躊躇せしかと風甚しくやみせん方
なく再ひ舎に帰り宿す
廿一日門司の峠を過て小倉にいたりて二更静なるそすらん

と旗艦九隻錨をおろしたれはにや舟の沖の鷗の群
遠く網引舟のすなとりあしいやとほの森の樹の緑こゝに
松の浦と臨みにしは波平かに数の糸つらねを乱さぬ下関
の小倉の浦まてにます潮の満ちくる時は舟遠くなりとなく
来てこえんなるみの岸におはれいまここに別れなりけむ大里
の別荘に休息しまして小倉に宿る八重桜海棠桃連翹なと
咲ぬきに色ひかしほに暖なり
廿二日還る田嶋より西に坂広寿山の額隣にせまり
黄葉の香漬て宿志満くしてせんと
いさましく遊旅の人おのゝ備覧の旅に法店を軸轤

まで来り伝ふる所何年開山即兆自画賛横
もの僧あるに盆を持ちて居る者あり衲衣を草画にかき
たり右に設那双眸描き出し又同じ秋盆草時線描（抄）
集勢山即兆題と書けり唐に福寺の無言と云ふ法自生霊
秀英て締紀る味ふに角秋紛して角柏岩筆と落添けり
碧岩の画に三僧の頭鑒もあり観音の唐像右に小縄墨に
柳の小枝深輝き蒼く図あり 三僧ノ隠之書写 即兆なり 即兆遊戯
の図鑒もあり髪を乳に切たる者あり僧衣に墨摺紙
持たるに拂子を執る岩に線かけて右の小岩に香炉
を載せたるに少麻の霊芝を盛へ今り現はれ群乃

草画なり径山和尚の壁書あれ中宗狂堂乱作忽
ゝ德有明らかし開山瓔珞の天軸（一大字）廣壽開山即兆和尚
禅師瓔珞十二字（字）の篆書は練方と書けり文章ハ即兆
の一人明洞の選にし寶ま勝望にあると同じかく
即兆の徳業なりと伝へし国に学宗経宣選と書
りけるに唐山人と見え書ハ京七絶（絶）の軸径山笠清
雲書と書けり京ハ明洞の字なり題ありけり清（ツ）
廣壽十六京なを岩足立居万松軒瑞麻に居放生池
看雲亭（亭カ）画讃鐘聖海楼（楼）僧来迎白雲豊田
洋なる字関大観海白鷺掛四月嵐十八松なり大

硯海ハ赤馬の海哉ならし

廿三日赤間関止宿

廿四日巳の刻解纜出て大川をわたり赤間を隔て

越纜して博多にむかふ道ハ川に沿ふて屋敷の哉行て

飯塚宿なり哉二つして山家止宿

廿五日二村縄をり左へ曲りて博多路なり宰府え

諸ち山中捷径わかれて宝満の渓浜越え郷切月て

御路を行く宰田川（宰府山より出ル此川なり）越渡り二日市越

五ヶ所通の出かた川を渡り左ハ博多路なり左廻り下る

梅ちるらんハ国中第一林に出阿有つらの二人とて

菅公にゆくつらく奉りし哉秋祭礼の時神輿

出りも休みしたところにきたり二千町ばかり行て宰府町

也おもれ畢て座主の坊に就て再び離家の神宝哉拝し

（去年神宝の写し借用れ御礼謝を述ふ）行厨開きて休息し町中より左へ曲り豊

染川をわたりて越えつまくありて博多止宿

廿六日福岡の紅葉ハ嶋の前に有奥屋へ至に休す不寄

居大なり境内前後廣く松林あり殊勝にして宮居

をも摘する寺僧紅葉に似ぬ日録を乞いかしにその名を

もみぢ松原とも申の松原ともいふ故に宮居も路も

唱ふなりけりその故なりしと菅公なりしハもとすなハ

詠せしうちハ百千ともなかりし松の多かれハにや　楓樹
の大なるもなかりし多くハなかりし　数群生ヘ繪かゝせられぬ許伊勢より出る
色に赤き樹を掃ふて微班　又葉紀せしに自ら生ひかへるに枝濱に有
深山の内なる如くなり　深山止むる
廿七日逗留す　紀條の西君ハ浮子に風情續る
廿八日天氣静なれハ手時に旅立して濱に出皆生郡
なれハいよの濱よりみ明石近く見ゆ行くらを　あゆみなから
記して濱邊の街有に出　丘上の棟宇ハ鶴に倚条木の宮祠
なり神功皇后の鎮懐石なる神体と崇る由石をハ秘して
見せす　丘下に皇后の舟繋石岩有り　住吉二の宮あり
ますく海邊の濱満ちてありしハ碑立ちるつらし碑文形之き

料に大石居へたり　文字の草稿も黒長ら扶傳へり　古記
軸物なる合せ見んとて山上憶良の話遠石なる詞
中にあるなる深江のほとりみの二つのもしるして深江の
ありし跡ひとつあるに接れハ深江子負の原に島に海
ひとつありし右の霊石てまひ下ろ失ひしの天和
年中に拾ひ得て小祠を建て崇敬する趣なり　貝原の八幡
宗本記にものしハ記ゆしくしたる右の二石ハ堂心の住吉人のかた
あるなり像の上の面なり　石ハ八幡の神体に九子石を用る由鎮懐石
なりといふ法なと万葉風土記の證となる　来り濱邊の松原子負の原の
あれハ信すへきとなり
ほとりに戻り還り来りて程中の八幡に参りぬ　別當に誕生地
秀学院といふ豊太閤此處まて秀頼の誕生所

三郎時に銀清何りし飯山寺とすと云 社の右に八ヶ所の橋とことに何り七八ヶ所とて
飛りて花の如くに実然むすびうりちらしき趣何りしの鐡燭残移多く戸出る多人を
三日の上演よ別し阻こ雪山かとも有中に江雪の墨
蹟欲て雅なり夢の字残大字に書して麦城に突出云
剥称之麦吉巣なり麓山雅了移ミ済し短冊為什麿嵳
樹々種足矣江雪野袖香
廿九日ずっと雲雨 江海想古 呼于無既
晦日雨霖
三月朔日 天晴て結店様呼ゐと いとよし
二日三刻頃出て浪済に休む 右松屏風に亀井昭の書 昔関済緑雨談浪遠見鶴宮

雲理居舎○百島丹居 此年雲樹戸里演溟波波紅の経筒菊同詩云
芸学海多け白塁将人演夏登の渓雲眼鶴来中家桂月蕨風ゆかし
すなきり又哉と 唐津に出有す城主旅舎に来遊宗郷の
例れの韓あるべし
御筆色残遠し空混山時
三日天晴て室三の良辰為れ旅舎に寄りて正興
将り将よ仁書為して清然を為しむ あるし蓬蘇白波残寛于然りの
風り ひとし
四日 少食より四色し海の手も掛ひて呼子に 訪ねし注をかり
六日市中を出て阡陌を近回し松浦川の上流を
出つれ経大渡りと云 此渡百里そ明かりて 旅人の往来を
渡す所なり川の両岸松原にて両岸は長く断え

此川ハ西路三里ばかり上より水源たるみすみ山といふよりはし
輿地誌ニ見ゆれハ東ハ名府の辺西今里辺より出て合流し松浦川となる
内海の形をなし南へ入る
松井の見渡し吉井岳雲間に高くそびえひれ婦る山雲海
古色乃ケ万葉の跡ありしとて五日路二十町西に鏡ノ村
有りひれ婦る山の麓にて鏡と云濱崎への旅方
社出て虹の松原南岐にあり夫より松原より三の村に出る
是より東濱の衛足名護屋村の端の廣野に鏡大明神の神
事の時の輿臺在りて奥村と云又相撲の土俵を構へり
名井に鏡大明神宮の宮殿祠にて膝にて杢木
理のよき板にかりかけかけてあり最前の筆意とは
見へたり鏡の社と唱へて西向き右の方に有り西向ハ大
宰大武廣嗣を祭る右ハ神功皇后なり荘厳なる
なきにしも祠境内なかさひたり九月四日の祭礼にハ城
下の者近在の老少群集するよしなりこれ婦る山の
根に恵日寺に遍に禅寺なりける山門荒廃宗なるんと
見客殿の庭後山にて狭少に重キに山崖に倚りこれ堂
岩窟三丈ばかりの高さよりも清泉流れ落ちて幽趣
有り鏡大明神宮の印形等なりとて此の寺に残り家
の子つしありけるに朝鮮征伐の時に何人の持帰りける
ことにて古き鏡もあり熟祝これハ大永六年云々と銘

つゝ海に應安七年よりて朝鮮ふ弥と聞付て朝鮮
征伐の事ハ誤なり應安ハ後圓融帝の治世にて溝
将軍の時なり四百三拾四年なり古の朝鮮と通し信
何りし諸なり鏡隣して時の古今ハ宋ノ太平興國より
大何れハ八百年餘のもの之章とありて何か内宮と何こ
ゑ宮ありて本當に思へるとこころの正観音之普通の物
ハ許されとも野識の所示望あらハ寫し態すくて則と佳物
借かしハ結縁の為何りと寺に本堂に貴我堂
きに態傳四五人見し佗藉尼寺奥済事に様なりて
寫し態とり八寸ほとありての生ハ黒ふる古像なり者の

緣のあらハ小金通しよりて見る傳来の子細と知らるゝ
再ひ宿厳み宿とひしくさけちらしとりひろけ藍等
も散し文門院ヲより見捨ひ草摘とく宿に帰り
八日 紀海の無名 猪本備帆
十日 熊本老生の子秘君し小西方ハ東都の出居之国
馬君魁殿接擧し 君魁當所に来て教授して
今ハ君魁の孫某士なり古家つくへとて我して集ハ
借らし見へる
十二日晴天気よけれハ市中を西にわけて名古屋と
いふ門何出れハほなしとなく川河あり唐津以神船の

輿賀有り唐津明神祠八幡同に合と云ふ城郭に傍
ふ虹の松原ハ是より東山手嫁長嵌に舟岳雲に
聳へ近くハ高し海ありて海ハ大島有り姫島も見へ
又けり山水の眺望頗る勝れ并て一里半許り行ふして
妙見浦有来りて沙干潟を渡りて大深有り
到る苫庄ニ至る十八日旅宿を出の二十町関に至る諸当の
禿祠有りて不二しかけ綱掛り芽を岩し妙見
浦有り立帰り立上山妙見堂有り此両の社を出て浦に出
数多くの村々有りて村毎の家に船を有り厨有りて機を営
路を海辺有り旅舎の向ひ不二の家に鎌有り岩屋地に到

冠木の多くの種類の樹木楼造り多くの株ある茅
おりて葉色艶なりと見る遊びて銀の常に心にそうの
造り樹ありし
十五日南郊を散歩して多く丘野半里許り飯田山と号
する大興の山間なる沼あり不思議成る造りかけたる郷趣
ありて巨松に紫藤花の纏ひて色濃く成りて来りて上の
田村の老の宅に入りて破れたりちりし石に擬すべきも
難し
十七日 曇りて雨 晴て出帆
十八日唐津城下を出立朝鮮の信使正月廿日初発

程なく二月初八日東萊府着同十八日ゟ船の手数整ひ同月
廿日出船三月十三日豆山浦ニ帆十三日佐須奈（須奈）浦着船の
次第を告知らする家並封（えノミヽ）の書来りよくつゝみし
廿三日韓容佐須奈ニおゐてしばらく一日ゟ逆風にて役
謀る勝本の西北渡海の告を待ニ発帆の日付して
宮日より飛船勝手ませむ為の雨かぜ晴られて霞
ふして舟出せり
廿四日前ニ和（和）太山の高議定つて南風ニ乗出し御供の
船々名古屋の方ゟ洋中ニ出帆し揚て満帆を張
地離れると其の後強風ニ高くつゝ浪高く夕の浦

やゝ行くて申の刻勝本浦ニ舟繋して少しく島山の陰
ニ漕りてあらハ為ニ泊船なれハ沖風吹つけて動揺ひ
甚しくあまつさへ雨降て苦しく岸ニ荒村の本尾ニ宿
して霖しけり　浦名なれとも本ニ三百とノ家あり繋船
の用ニ供ふるを書るは漁小舟なる也漁舟
東ニ走る船して出雲河の処ニ出川のさき河（千本）
其の尾の方にあなり行君のくらしといふ
廿六日微行して本岸に上る石燈籠高く宮殿ニ
庭のニ丘ニ大士堂あり夫より陸行の山田の間廻りて林中
ニ天満宮及文山を挙て見渡ハ頂は廣原ニ松杉列樹
及び旅中（牛方）多く是（是）ハ長山としふ山の方見ハ一面ニ
田畑あり向ひハ遠く山々連り其裏ハ勝本の方

なり木山より見渡すに田畑あらぬ所もなくして高峰
峻岩絶たる浦に臨り市店立ならびし当寺より
猪苗の方一山越て里をわり安国寺といふ禅林あり
則ち当寺は安国寺の法末のよし住持壮年なれども
京師に遊学せし詩語にも達す其の師の名なれど
りよしく見すゑ一郡中の雅趣あり旅宿に帰り
見れば床に一軸を掛たる宗寿縁樹帰鳥庭に養花
蔵花陳山渠宏業とかう文化宗月琉球人某
かき写りたるに漂流して過る時のよし書けり
其跡見るに写されたる物にて有みつらしけれど

記す
廿八日東の方経田路を一里斗も行て菖蒲浜に出る
白砂清く半月の形に廻りたる浜につゞきたる青苔北
野辺に志て年数知らぬ松漫々たる眺望にすぐれ
しも海清渺かに嶋歴然と見えたるに烏帽子岩黒く
見えたり風景よし浦遊び夫より西へ趣きたる
釣浜といふは汐に交りたる黒の小貝色を拾ひ珍らし
時まつる一名目不絶の浜競ひとりし一行餅り遊具し
庭海ちを徐歩して寒力を費やし一日暮あり共にけ通
日暮らしておのづから虫出候

四月朔日になりたれと猶南風なり浦の南十町ほとなり
の山上に石多く頂にたてるを石筆山といふこれ
一山に登り見れは海面を眺望にて四面に田野
林邱堂舎に至るまて眼下にあつまれとも坂路を昇降
しくて蝸廬の営陶にまさりたり
三日午時過に出帆して紗波なれは引舟一艘にて漕渡
り八ツ時浦郷の方にまゐるといへる浦沖の三ツ瀬ちかくなる
梟雲涛唐人坊なと手にとるに見えて越へしか九ツ時頃
小瀬戸に着し雪祐方に四ツ半に似て夜更家に入り
一艘賊辰足り 此浦泊りて翌日 若浦出帆
信使三月廿日使渡海出帆

行路延びなく
廿九日勢あるの客艘に乗しけり 此日まての〔?〕知り 出あ
四日更に風よしとて告あれは起いて船に乗るに未た暁に
出ぬと喜ひ合ふ中に出帆推遷る錢語する事にもならて称え錦波
情きありて行り旭は山に隠る船は海に浮ふ浅黄に志す船の屋巳の
風をうけてれは帆席掲く揚る数十日の胸を府に挑し平安の私
中飲食十分に行く漸く中津より風衰に小雑也見て折ふし
くく波のうねりも生したれと逆風なれは程に出れなく未の刻
計に霖秋伽岬を忘れく越へて府中の港に着船せりこえる
退かき便風の絶偏宜島に行まして邦方遅なりと舟を掉前来

ら未まくの寿因張りなし旅舎ならぬ家には非ざれば始めより住居

の者寄りし始め在勤中の公務は更に人に障りて記すれはさてにいは出入

の者の題目銭等のみ而已矣

其日併熱ありて喰するに荷物も取出し明くる朝夕の用便向きとの

都合も以て急ぎて昼夜常を休めず南北方を歩行にて往行

さ是にも怠るも御座ありしに今宅迄の段道を知れ難甚[熱る]惧の

敷しく焼出して宅へ来るも跳ねりて陸奥地方けにて

黒烟紅焔室に立て塩者は周章するも裸にて南部は住居と

様なりし宅との陳の間他に住更に流せる湯をも浴すに併居ら史人

転りこれ[ハ]端に眉毛鉄焼き火の災[災]之而は縁は火を拾ひ泥土内

御[よ]に勝更殿下の出陣きに在り御らでる早業了並りて泥土の中は

なれは唯数年に来るに来るて錦の軍を出して従者の資

財雑具を拾ひて熱る御れて兵乱して損損す様子の

宅を様にて之に出る世の人之を在れは泥り中にて極[赤]の上

に踏り居て数は游しつつ兼任の差紀するに従更の足も生え我家

の上部の無数には非ず也と知る故こと為りて旅宅の経由為れ我[家]人

の相当了なり出れりて其中に[き]宅為る成大に在猪[擽]乱中に

称の殺れ換しく或は泥土の中に廃りて汚穢しても此の如き

衣服武具並紀書其他人馬とも不残[焦]失ひしか之は家屋

陸[子]に移りに及ぶのく驚愕も定りぬ折に惜しむに拾[かゝ]る事

行旅の事書綴りし草稿座右に置き定家の文庫に入
たりしのりとに於花中に携へしからん情懐に沈みしからん勝に
接ひおりし者にや何らん百年千万しらく願求れとも出来らん
天気は寄にも者く秘融（いろ）に我を得るにや思ふに不遇ふかつて
ありし秘花の手筆わひしは人知られぬ無窮の恨を残し置
之実は須里義経の回緑の危き浅瀬動中の首途にて夢の心
地にて八十餘日深山荒海の辛苦はかりし一日安しと打ちに吾知之
まして他（池）奥の思ふ遇ふにて茂中の茂是なる人東萬里の聖名を
あり行れは（之）旅装再度の火の災ひは東萬里の現前の東萬里を
九日客殿（館）にて信使上官に若松の家保を贈る諸寄臨むる

十日客従官十三人に童中に及まで酒食を贈る
十五日上使に寒海従属翁松
五月朔日副使中書に大学頭高翁松
五日尚霄より大風雨僕（俗）務中使節（節）に謝を述たり
十二日大学大輔諸家吏家式（氏）の邸に行むと此と云く行礼の式を終りて
十三日安鼓ら五信ら両に信使に對し其后大輔入来り信使
尉学の門ら我備ふ式様殿之宗待従族（族）何せ（子）岩石丸父
の書信をなし嘆き入り給ひ
十四日信使新知を悦ひ旅情を慰して盃盤を調へ綿り彼国の
卓料盤に和物の陶器まくしく盛なとしたり厚意にし

○從アラン

廿一日宗氏の邸ニ而信使并國主の書簡改儀物ニ添へ捧る礼式
兼而の議定ニ叶ひ且両國の交誼敦厚之士民萬歳を唱ふる事
廿六日同人家臣を遣ハして物を贈り速ニ来るを感謝限なし
廿八日信使鍋物草紙等を贈る
六月十五日宗氏の邸ニ而饗宴之時通辭家臣數名信使ニ示して
とかく湯つく御に許さる礼式宜等ニ叶ひ恩遇を感し宴當物の品
義なすに驚嘆且國物業の通盤を續く下々の家賞議更
聘式改革の事件ハ去る巳年譯使の面會ニ其のせしらハ報國の
母謝も首係遂てすく全く佛りと見下の饗應之徒士の画家ニ
信せて和議を称し御の如信實ニ國中の名画家ハし敷石とかハ為しけ善画の
画工ニハ通ふて之禮を以て諭らハ画の精工夢ニも不報ならんし

餘りあり能中雲の魔將 征東日記 唐作 齋東の画 松花 茅云 二の二ハ謙ニ天下の妙手
賞る辞也とく者ゟ見へて餘ハ暴畫の筆力梅月野中なとハ見てなし
足らすといひしとかや其中ニ画員の往ニ極めて眼力驚き振宮崎
ありとも庸人の目見サハ雖あるも雖自負と賞せしハ其物の人としハ其技
ニ孔る妙ハ只ハ云ふ可き其の代に優劣の所據等合節之往者の画筆
に入りてり知ぬへし
十六日聘使に限る礼等を贈る
十七日御家ニ来相して當り松院ニ請遇すりハ幾の僧ニ退隠して
後任ハ新知之
廿一日大学頭家殿ニ請ふ信使衆ニ逃官書記ニ面會筆語

侍章唱和出雲儒員翰墨の妙會なる典例に廓しける人筆墨の文
接する事到着れハ枝膳の葉盛の慕何ぶこの事生涯の面目之
廿二日信使下行船に乗る
廿四日順和便風なりしとて舟に上りに筆佐の進退を侍て南に
発まして未刻廿七日舟出させ信使ある便風待得て揚帆せしん
ちりまで平河舟の装を鑑観し紺の大四半に西字副字白く染出
して弓残両係の旗船に建て錦旗陣の旗行ハ具残幾なる使ハ
楼上か屋し坑を旋る港口を離るる鼓吹すりなら去年の
謝役使の併せて矢刑しる年表之旗船二艘と船二艘之属士護送
船と更め鼓帰りあり風雲殿両岸島に影過渡りの様を見に

徒歸りし晡時に下舟しなく再ひ室に過すりハなひハ出勝築
く韓人の遊客ハ遊覧の事に昼ハ事果なく出帆に日数
經れハ疲労しなく山野の逸興ハ観漁の遊戯に用達申
うちの昼中ハ必ず約し雲しの業の外に出帆を致
疲ふく居の山水に出るハ海景の湖目に到るされハた
ましてた白岳出板大小船残鳴瀬なんとの郊遊ハいふにお
及ハず唯宮徐の室に出て暑残苦しなく数風景なる
出勤なり
廿八日前夜より南風強く曉より甚烈しくうふつよく
船を繋き会ひ人々関章く海に逆上る古田の先苦しや

唐崎亭に宿見みに仮す
晦日寅の刻ばかりより船出すとて洲先に行く船より同
伴し先づ風雲の静なる模様を見るに稲(泉)敷にまこひ
て曙より船に乗る大崎若津静に帆して府に至る
るに風力弱く遅緩なれば三分一も行かぬに東方に
雲起り怪風暴雨雷鳴して安からず洋中より岸
近ければ急ぎ近きに寄りしの翌朝の地方に寄りけれど
みなもと風雨ひ吹掛ひ汐の勢ひ逆ひて行けず
府中湊に入らんとせしが汐のひくに二町ばかりの岩険に
繋ぎ船ぞ家一汐は至綾の岬は(と)越く阿波藻の浦曲

に七ツ時頃岸に碇おろせば至綾の南村鎌山の隅を心あてに
に沈一つの浪風より隔ちに遠く崎を入るなる境
ひなりけり鍵府中より七里餘もありしかとこそ津
島の端なり山の奥に朝鮮の峯も嵐見ゆ二つればおのも
に奴肯観之金山とは遂(遂)れなれども通りては
波浪の強弱をも知らずもの高き窮海と心得て廣き
心を寒しとて行けるならず此方の唐突なれし
く穏なれとも萬の辛苦に積り積りし枇杷波濤
も読みつく秋纸明かす
七月三日漸く風雨収り府中湊に居て泊す

四日出帆の催ありし雲色山ニ風爽(サハヤカ)ニ白帆
を送りて快く寐牀伽の岩も礙刃の別れ程なし
御の中刻ニ湊を離れ波浪静ニ穏座前着して
心定りなりし所実に思ふ人ニ逢ニは(と)かの遇(色)てるるの
恩ある人なれハ見ぬ悪事とあるのみ書するには鬼(兇)園ニ
母子とも理りせあておもひ定すれハ秋波もなく瓦
人能果己して風力足らて洋中ニ日ニ数ある織月之
下て傾く漫とより蒼波の上ニ只帆舟只抽とあり
無只炭ある世数艘の引て両白昼も秋の節ニ縦るる両く
帰れまへ一炊ニ居りける日中ニ而て星霜(者)遷移を

寄れハ秋気も冴え星も満る頃ニ出帆して備前近く
來しかハ湊口ニ至りて潮勢ニ推返されて岬岩に多く近
閣の乃船梶士舟子ニ疑の引手ますます苦心精骨して危
難を逃さん為ニ旋(下)せしかく了ハ諸人の面色も蒼
ニ漫しぬ尚船を遅速なく後して秋も明けはじるやうやうて
船を着けぬる
今日ニハ天気和風なれハ昼夜の洛(絶)埣ニ船人等
絶しなれハ気力強書つくして泊船ニ安定し旧識の
主紀が家ニ入りて燕息けり
今日在ニ付出ニ家帆しけるに麗色の五様ニ変じけれハ

帆斜に吹きて掛る舟往左往に大いなる浪を打つ夜の心中
穏ならす漸と南より舟に廻して行は風波をたてまつるに
舵工力なく浪しくて大かたならす鼻越(越)ゆかんとて幸ひにて
加賀に来申の刻を稍過して十分の追手を順風に吹送り
まち安作の波浪を凌ぎ七時過に暁家の湊に着船し
旅宿にたとり燭火東雲にたちなり

何事漂ひ
かゝる浪の上

十日の暁鐘に喚ばれ出山路の暁京参らむとしてはや千
草に添ひてく虫の音も心にしみつきて行けれと雨晴
の袖も乾きかねあはれなるやさとの峠越へて小川に傍て

東北の方へ五六町行は佳志の八幡宮古びたる叢(び)(叢)祠
あり庭前の手中に古き鳥居の額源頼朝の文書ありて其の端へ
漫つてなせるやとありしに海に流るゝ小川に橋を
かけ哀れ寒す紀浅きに旅人は往来に戻りありて座
津に出宿中にてありしは白鷺れは上下すきまなく置
て止宿す

十一日 滞留

十二日 晴て止宿

十三日 晩方暴雨の風傾盆の雨にて徹夜の大雨に川
満ち溢(溢)れて通路絶えけりあまりに雨をみて流れ

旅ゆりあるハさいつの川にそひて臨花亭なんといひ罵りて
水いつまても充盈して襄陵と云

十五日天陰風ありて地擲船ふ前進留す　永井尚武詩稿一冊を
南史の家のあるしひ持まゐりて家に寄せられし石岩備中の産にて
手毫を出なひ一国に傳んとて老筆紙労し画も作詩し
きたりて寄られ博学多才の著述目も数千の新作序業し
て詩に数し見に中の者もまの何か近作居候讀篇を
読者にまかせたるに有しまゝに在し擬花卑に写生の七絶を出
と南史か家のあるし公傳之いさゝかせ参り鏡蓋の故に称と了さる
のを安逸の任地に残りうる見せする遅慨といふれと
いまうの處きて跡すを旅日集してわり

十六日天晴守に集諸しまた集諸の期にあられ
八一し候宮と號の前とりまさりうるうのてたく張家
主説に来見し夜ゆ名残りとけ刻うつれい神社掛を

立出ぬ二日十日の志なしに雲行かわれとすつゝ静にて
明山岩さまて帯雨の霽せらん前つゝてまちあく川か海
海れ橋と旅様さすうに到し水も漲に奥に止宿し　十九日荒標
大学
出船

廿二日前夜に船来て荷物積を掛り纜解きしてく
平明登船は朝陶漭とし波は筵のあく穏にて
と赤馬の海岸に繋ぐ船しし向わたるハ走に中の世紀
にまとおもひしにそ刻よ東に南の風烈しくて隔も
難かれハ陸に上りて旅識の旅屋に入り船と風
波を厭ひつゝ赤馬の西方に一里半りのいさごにあふ

小浦に下総すあたりより西人の云ふ三四五の島ある或日

廿日も近けれハ西土の様も覚束なく只怪客に筆を

費ふくが振矣

廿二日南風と見一しきの学船に東に吹りて陰晴繙

乱強に廿三夜無楚なりとて船出さ

廿四日も又筆定りてし檣の浦より白の浦まで百石の古

云の都とて船人の檣櫂する隠擬すり突岩馬足の

如く水中に水底まで引泊めても影れすれハ人の居るなし

船底岩石に或れハ船人とも心滅却破船の隠に寄

破見して橋首に没入人の在る所にて手探りさ幾多寄る

不可渇と云ふ

廿五日は子の八二日三千里之加江廿六日夜に船人の嚴粛に

東雨も如舟艪引上て碇おろし風の詳ならぬ方へ行

廿六日二百廿日北東なりしに寄夜より雨ふりて所々されは

猛しくのうなは

廿七日は禁忌日もあらしてこれと東風烈しく驚浪甚く

是飛とおもし日宵もまた再に入る極まる方の空

もうるさしや

廿八日も宜風穏なるなり

廿九日も晴日も風ハ静かになれと檣寄る日に

備后は海に臨て辰に向ぬれハ矢宮の関ハ西南にあり関
基は湮滅して其跡もなく農家漁戸見ゆ上の山ハ北
閣に清游と名つけたる景色の秀潔水ゆたかに青山映じ
遊客も多し其ひだりに風師の山は柳か浦と矢宮との
間に廣く盛ふりて頂の松ハ黄冠道士の縦中の如く森り
てかみ樹陰ありて風師山おろしに危急の雨時々
あるときハ數日霽れて眉稜を見る年同井しての
霖雨かゝりて金物より出て拂ひ蓑の岸山の端に
見るゆゑ貞観元年宇佐より石清水に勧請ありし時行
教和尚二の宮に祭りて夜半中に神託ありて勧請

物しぬれハ水上にも所ひとつ水際より石階高く聳り
小山の上に祠檀只殿廻廊絵馬堂鐘楼を備り
前樹深林覆ひ界として東の方に向ひて即ち前後に
入る松の陰は坂下ゆゑ見る東に向ひて左右に繞
ひて矢宮の湊風師山及び柳の浦半を望む右ハ門司
浜の浦見えて其處の繋ぎ船は引入て見ゆ又岳山の陰に
市中にて社の前に東門在て依来詣路なり社の右より
其道を堀上より見れハ青々と山と連り杉々山
外輩の早き田の浦ハ山に隠れ柳の浦ハ其下になり
月秋寄京畫像主人して之の問遊子して陶梓經過

し舎の前に船居して網引にて鮮とる所を視るもまた
村雲布満て驟雨に雨唐土海にぬりたり文字の浦
と遠山と山足より彩虹立て弥くく山海の出京歌ゝる
賞情を生しき古詩に江陵去揚州三千三百里と引一
千三所日二千在といふにひとしく左右の海江坂急
舟と連日石硯風の綴ひに七月はもや暮けり
八月あるの月の廿三日に赤間に着しけるに雨はけしく降
り海の面あらしく風わそろしく向ひ吹きおしわおりて
出んとすれは同しやうにしていて十日の日数をついやし
たけり月もかわりけれは天気も能しく向けるも

いひし八郎荒とて船人のおそれは何とやらん雲の色
もよく穏なとみえ待しにいひもてまきしの九の
刻すりたり明霽しておもしろの日あれつる日出るたく午
前に高みの順風出されは喜悦し登船して千石に船路
ひくきみ高きこき風に追風ふきて開門の前と平津島
仲津湾千珠満珠をすて過く越て松山の鼻ね大輪に廻り
馬手に豊後の山と順島を見て見花そとしら
船やゆく日とに十八里来て中の関も目に参新向海
をゆる左に見送り大津中路つゝ日のおそくすみ人日暮とて
も程すらく船進みて上の関に四里空しく宿損

の湊に碇おろし此室積といふ地名なり普賢山の椎
室といふ人神託にて遊女の生身の普賢菩薩の影を現し
たる旧跡なり又性空聖人も遊女の鼓を打て乱拍子の上
句をうたふに床に跪き観念して周防む
つみの中なるみたらしに風ハ吹かねとささら浪立と見
給へり今宵ハさして風浪も立す海上静にて船の内にも
心よく安寝せり
二日八ツ時より出船しけるに上の関浦を過て是より海上
ありしもの所の東西に遠見来りしの遠山一
寸延れハ霧延るの浪に何れハ沖の方際に見え

洋中船行しつ風勢強く日に没す津和船通る
かかるに小舟のとしかり漁船見ゆるやあらん 注むかへの海中里程
八注 広くして海中の中に深く入なる湾なり岸
上数百人戸あり海人の生活して過ぬれハ風あそすさ
まし
三日朝より海船帆を揚
四ツ半時ニ碇を上け風なく南山に行に遅てたり
昼過に汐時あしく漸うれハ風を感みすの浦に
潮にのて引つけたり 此辺里数百家構にして宮島
も見ゆ泊豊の船あり

吾未的に鼓ある順風ありといへども出千島第嶼窕
轉して藝の地方にハ行末はるき杳の海に東の城壁
乗浮ハ儚けれとも迅速に見え尾の浮も高陰年
莫深く沈潜して泊りて離れて洋中に出る時は
八月昔は秋分潮をなして中の秋の颱風なれども
吹来て万頃の波は衝破り白沫飛て空の色は
の雲と逆浪驚濤みたれ来て舷に降る
に難破して何の危の魂を遥に離し舶の湊を見
退ありて飛瑞の綴なる盤渉に浦くときは海波浪
に遍経去て母とく婦く那子城はみえとも向に白石

の迫つる颶風入ハ湖ハ一入順になりて益進むなれとも七嶋
北西より金毘羅の山を 祠の後背を見るなり祠のあたり と指すところ連山の峯ならり
おして振に婦しともに水路を右に見て浪高き近辺
双の西に行ては津井も浦おもしろく千里江陵一日にと
謂つ隆して大槌小槌の方位に高松の麓ハ遥つらに
八箇の山見る 是他国高松の東南に半形白く生左右八箇の なり源廷尉のむかし高松に陣取らせし所
ところもありておしもあるは高松とも云つ舟の帆掛り
りきときこつら何りと云舟人語るものから年れ高松と経に
ハも上手なる山あり日に湊にて通つるといハ小豆島右に
へらく海中に赤浦行り是も泊て寄りなり家に碇を打されと
と舩人語り合しつゝ日ハ入風ハ北に絶へなつかしくたちひ

此度は八重垣に薪り吉と呼ぶ山に湾曲に弘入て六十
餘里の坂路を遂ぬ方は安積に雪濃水淡の其儘
て宇に通ひ其他の宮あるべし
此国風見まし宮の神に遣り出る鶯は修せ
新年宮の安山ハされハ横雲ひきて松中色絲弁
此淡路と続して朝な夕なに舒白の離れてさなが
ら景色の画譜波の中より差し昇るハ住の江
の辺りかんえはいぬ乾坤らけ霧晴て淡路結
彼の山と縺せ見ゆ鴨戸と和田しき山の路帰り
遊覧なれバ懶勢を見るさ彦こせりにあり大坂

始も赤穂も見ぬ墓りの秋波に集まれハ唯満々と
に聞られ帝帆に白松に豪られ奔り落ち松の葉より
しらハ十有五里の海を越九州時の宮の湊より松路屋
しる船安里餘坂絲六々に兼行方偏に帆力の着岸
舩旅有り路有り風のさまなりせんのさ歳なり
七百年遍く東風に向りて南色有りさまふの年
福実に盛を讃美宮の明神に詣ふ石清水人五
社並び両しりてや遠り都の妙なるて平等にそのし
たりとふ寺殿に上り古続るを見る将軍大炊外
元信花押あり連織るに繍重なる鳥帽子集

社前なる舎人の口取したる二枚向合せて図したる有り
画けるものゝ古びたれとも筆の妙いふにいはれす住なる
つれし拝殿中にかゝる二枚合せ唐絹の蝶つかひ
つけ屏風にしたるあり繍馬堂にかゝつしの絵ある所
りし寄板その額わたるに見ゆ中古かゝるは古抽に絵ひ
みしかも古き龍泡にて両の鶴接按の筆納のうし古絵
には重衛府将の筆のうしいかなとにちきおもふまむる社
の旁に神主の向ふ時懸所の行けるありしとて馬場を習
庭欄にある実状につけ手向り様に此の庵に流されたる石径
高く菓にて行けり樹の下に渺漫としてに足る

繍絵渺漫として見えて浦の漁舟数艘をうかへしさま
光景妙にして実に陶り爰雅の走在り
八日出立して姫路大花谷なる宿に止宿
十日大坂に着て野町に寓居し即日当處に見ゆ
すゝの我か東西市寧の紀歟いつもの如く叢
好の周旋親會の開きもいつものことし云々終て更し
十五日京に上る偶不情我の旅生大會集誘詣集の是
殊更集詣の志深なれは奉幣 勅使節
前皆より雲山に入りて実寓の繁多に加はれは微行
の集詣尾竃なれは布衣にて日々家途の慶祝をして

あし植の岸の木の間より茅庵のみゆるなる所心ある
小堤河の堤の上より畑ハ稲をはこる今夜深更
に東都より来る諸御用山崎道路(洛)しからぬよしなり
伏見に出る事す
十六日晴つき朝に伏見より出京ひとまかりし伏見月
の都しきつのことかりにまみえて秋の夜の面しろさとおもひきし
人こそ行ふに秋の空の面しろさは旅行く湖江のことく
日にも近つくの空然湖あるは旅の情まことにおもふ
れ上京北稲のことしく瀧上にも望みさりとて後に来
湖の舟にて大津出石山周大和様東より来帰し事

琵琶湖袋 去他に大和評段（　）今宵草墓車下総ハ佐吉田と浅 竹の葉(面)形の字宝に蔵し出版生業甲斐等寄なり
平野郡々調しまして来て詩語越段籍す　出信州へ護生学ゟ
民籍に入て来二百余年の有つしかけては利ハ以て和州出相の景(謙)傷段
中て自ら(ら)下綬段解し新着の身となり東山阿より小田(渕)原まし
斜(えゝ)色(揉)有ましく書牘段大和に来りしより漸細ハ知らねと皆人知君
守を見る事秘家の事く深切に来に参ひ殊まく正し出家の際まてハ
問りし民波に
語なり

十七日去て東(智)深川栢原かく内出岩清岳大井といふ野
にまかり石濱(渓)の水音清(済)かりて叔をも面白かりき
いと相ひし
廿三日早来望京橋に有神宮といふる向に宮苑
御あり南山新激を捨て出羅瀑布の殊に壮観

あり雲霧漫々としてしらす仙人床と称する謂ありて嵯峨に
開る渓泉の響四面雲を生じて所を驚す峡岨の絶
壁に囲繞し上々すつ出発
廿四日清岳の袖として飛山甲嶽皆白し積雪真
門に向ひ奈良井出発
廿五日鳥居峠に至る地理百八面雲ありてさながら水の
ごとくなりし其塲の右に在る渓の冷淙する処なる塔尾
峠に登る雲烟興中に紀し山を隔て見る所は激
訪出発
廿六日和田嶺雲あり坂の半ばより谷を隔てる山の上に原宿

二ツ丸下り平右の石を大黒石と呼ぶ其の頂には山中禅ありて
形は勢錦たり路より見ゆれは大黒天の像に似たり見る
説紀して云ふ行くうちに下は松の像を云ひて見る人ある
行く右の方を向ひて像を右側に見て前に進み頭
巾の様を頭に巣類の如くなる肩背下は紀
大なる頭蒼高の差に紳の説ありて盛んに振ふ
すこし雨降りて枕ありて如何体変しなほにあかね形す
見ると奇観の殿なる西へ十に八九は見なれ我は
雑しと謂ふ所るべし嵩山の雲気が立ちかくるの時と
深く紅黄濃淡千種の色雨に濯りて殊更艶り

潤ふに快（映）する時京紅葉乱れて錦を晒すが如くなりしは
錦とかやいひし芦田の眺望も斯くやと思ひやらるゝ也
芦田宿に止宿
廿八日横川笑向め御持雨袖ぬらし晴れ山様麗しく
廿九日軽井沢を出て碓氷峠を越へ里の平地に道し来りけり
安中宿に止宿
九月朔日熊谷宿に止宿
三日以無満の旅宿を立農（晨）蹟と共に板橋駅に到り
酒食送迎衛のまゝく早晨に出行せ四年来の本懐を遂げ
斯りて天の下の一顧なりし当地新政の御一列

の事伝り居るなれは探りて訳官の約定を覧みし
身ともに一を以任重りして成否の安危に関心し私
事にあるに之れ憂慮の事多くして古今に渉さ
りし辛苦の職務千緒万端集執して今年と
以ふ今日ここに至る中に五ヶ年の旅役の労の労を
満てれは数言咄（唖）々の四字に紀行の筆を擱絶つ

日本政府図書
内閣文庫

日本帝國圖書之印

明治十年十二月

高松修德
本山正中 校

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan